

アセスメント概念におけるエコシステムの視座の意味

The Meaning of Ecosystems-Perspective in Assessment

中村 佐織*

Saori Nakamura

1. はじめに

今日のソーシャルワークは、クライアントの生活の視点から広く実践展開を行っていくものと理解されている。そしてそのソーシャルワーク実践過程を科学的に進展させるためには、クライアントとソーシャルワーカーが織り成す援助過程局面を考察していくことが必要となる。それは、ひとつひとつの局面を分析していくことに他ならず、なかでも第一義的に着手していく局面としてアセスメントは重要な意味を有している。具体的には、拙稿¹⁾でも指摘してきたように

①エコシステムの視座の応用としてのアセスメント概念

②ソーシャルワーク実践の中心概念としてのアセスメントの意義

③アセスメントの他局面に対する関連性

④具体的技法としてのアセスメントの有効性
という理由から第一番目に取り組む課題と考えることができる。

そこで本稿では、このような根拠のもとにアセスメント研究に着手し、まずは、アセスメント概念の登場する背景とその概念を形成する基礎的視座としてのエコシステムの考察を行っていきたい。なぜならアセスメントは、生活の視点を具体化する概念であり、システム論や生態学理論の出現とともに脚光を浴びてきた新しい概念といえるからである。それゆえ基礎となる背景や理論の整理は、ソーシャルワークにおける有効な方法としてのアセスメントを解明するうえで不可欠な作業といえるだろう。

2. ソーシャルワーク実践モデルの変遷

(1) パラダイムの変化とアセスメント

アセスメントは、20年ほど前にソーシャルワークに起こったパラダイムの変化のなかで生み出されてきた概念である。高沢は、メイヤーがアセスメントやインターベンションなどの概念の登場をソーシャルワークの一大変化ととらえて、パラダイム論で説明したことを評価し、これらの新しい概念によるソーシャルワーク展開の重要性²⁾を強調した。メイヤーによってパラダイムの危機と称されたことは、当時のケースワーク、グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーションに対する厳しい批判でもあった。それは、それぞれの方法が専門分化していったために今日の複雑かつ全体的な問題を解決する包括性を欠いたことに起因している。その結果、専門分化した方法は、効果や方法自体の有効性を疑問視されるようになった。

新たなソーシャルワークは、こうした経緯のなかで問題の持つ複雑性や相互関連性を理解していく理論としてシステム論や生態学理論に着目して登場した。そしてソーシャルワークは、包括性や全体性の観点からの問題理解とマイクロからマクロに至るまでの実践活動を視野に入れるようになったのである。この新たな理論の導入やクライアントの生活を視野に入れた援助展開は、従来のソーシャルワーク援助と一線を画し、広範なソーシャルワーク過程の展開を示唆した。そしてその実践展開を確立していくのに必要不可欠な概念としてアセスメントは、着目されたといえよう。

* 助教授

また歴史的経過をたどるならば、アセスメント概念は、伝統的医学に依拠した病理モデルや診断概念を中心とした過去の実践に対する反省から生み出されたものともいえる。特に病理モデルは、問題認識や実践展開方法に人間のパーソナリティや過去の生育歴に固執するという本質的な問題を持ち、生活モデルとそれを具現化するアセスメントへの転換を余儀なくされてきたと認識されている。

しかしアセスメントは、その重要性が強調されているものの、内容や具体的機能についてまだ整理されていない状況もある。特にアセスメント概念の基礎となる生活モデルやエコシステムの視座は、用語の認知度ほど十分な内容の考察が試みられていない。ソーシャルワーク実践におけるアセスメント概念を整理するうえでもパラダイムの転換を起し得た歴史的視点からの新しい理論や視野の変化に関する考察は、早急な課題であろう。

(2) 病理モデルの特徴と問題性

ソーシャルワークの歴史は、ケースワークの先駆者であるリッチモンドの『社会診断』(1917)や『ソーシャルケースワークとは何か』(1922)によって、科学的体系化されてきた。当時、リッチモンドは、ケースワークの焦点が個人と環境の社会関係の調整にあるとしながら、具体的な援助展開や実質的な手続きを医学や法学の用語とその内容からの借用で説明しようとした。こうした医学や法学からの模倣は、歴史の浅いケースワークにとって科学的、専門的体系化を行なうための必要なプロセスであったと思われるが、同時にケースワークが、深く医学や精神医学に傾倒していききっかけにもなっていったといえる。

1920年頃のケースワークは、フロイトの精神分析理論に多大な影響を受け、クライアントの問題やその原因を社会環境よりも個々の精神内界にあると考えるようになっていった。また当時のケースワーカーたちが、第一次世界大戦の影響を受けた多くの戦争神経症患者の援助にあたったことも、ますます個人のパーソナリティ理解に偏向していく要因を作ったといえよう。このようなフロイトの精神分析理論に依拠したケースワーク論を展開していったのは、診断主義学派であり、彼ら

は、「診断」や「治療」の概念を積極的に取り入れた援助で多数派を占めるようになっていった。

一方、同時期に対立学派として、ランクの意志心理学に依拠した機能主義学派が現れた。ケースワーカーが、主導で援助を行う診断主義学派とクライアントの意志を尊重する機能主義学派の考えは相反するものと考えられ、その対立は長期にわたり続いた。しかし、アプテカーも「この二群の人たちはいずれも環境のまたは、社会的なものを強調せず、心理的あるいはパーソナリティの要因に目をむけ、これこそケースワーカーが関心をいだき、活動するのにふさわしい領域であると考えた。」³⁾と指摘するように、個人のパーソナリティに焦点化した「治療的關係」を展開する点では、両者とも本質的に変わりがないと理解される。そしてこの本質的部分である個人のパーソナリティと問題を関係づけ、パーソナリティの変化や成長に焦点化した援助を行うことこそが、一連の病理モデル最大の特徴であった。その後、1950～1960年代に対象が、クライアント個人から家族まで拡大してゆくもののケースワークは、依然として「診断」や「治療」機能をどのように発揮していくかということに終始していった。

1960年代まで伝統的医学に依拠した病理モデルは、ケースワークの主流であった。病理モデルの持つ特徴は、大きく次の3つにまとめられる。

- ①医学や精神医学の影響を受けた援助過程の展開
- ②過去の因果関係の重視
- ③クライアントのパーソナリティ分類や問題行動の類型化

若干解説するならば、①医学や精神医学の影響を受けた援助過程の展開の要因は、まず医学の診断や治療という用語をそのまま取り入れてきたことにある。一般的に医学的診断は、「種々の苦痛や訴えをもとに、主観的症状がどんな種類の病気に属するか、身体のどの器官の障害か、どんな原因で起こったのか、どの程度の障害か、どんな治療が適切か、予後はどうか、直接診察という行為によって医学的判断をください⁴⁾」という治療過程を展開する。一方、病理モデルのケースワークにおいても、主訴を手がかりに問題と治療方針をクライアントの因果関係から明確にし、治療として

の援助関係を展開することが中心で、その流れや手続きは、明らかに医学や精神医学の影響を受けていたのである。

残りの②過去の因果関係の重視や、③クライアントのパーソナリティ分類や問題行動の類型化という特徴も同様に、医学や精神医学の既往歴から病名を関連づけたり治療を行うことと大きく関係している。病理モデルに依拠したケースワークは、こうした医学や精神医学からの模倣と重視によって問題を人間の問題行動や幼児期のパーソナリティに関係づけ、それらをより単純にわかりやすく説明しようとしてきたことに特徴をみるのである。これが本来、複雑な人間の生活援助をソーシャルワーカーに取り組みやすくさせてきたことにつながったと考えられる。

しかし病理モデルに依拠したケースワーク機能の限界は、1960年代から1970年代にかけて論じられるようになってきた。並行して①対象の問題、②効果の問題、③新たな隣接科学の成果と貢献により、新しいモデルは考えられるようになった。それが生活モデルである。生活モデルに変化していく第一の要因は、①対象の問題であるが、これは、1960年代以降の高度の経済成長を遂げたアメリカの社会的状況と大きく関連する。これまで病理モデルの援助対象は、個人か家族であった。しかし1960年代以降のアメリカでは、ベトナム戦争、公民権運動、公害問題、人種問題、犯罪・非行の多発などの社会的状況の変化と問題の複雑性によって、単なるクライアント個人や家族を対象にするだけで問題を解決できなくなったのである。それゆえ複雑な社会状況のなかでの問題を解決するためには、クライアントと彼を取り巻く生活環境にまで目を向けていくことが必要になった。ジャーメインは、この状況を『病気の比喻』によって『人間』か『環境』かという二者択一的視点が強まったが、『人間』のニーズと『環境』が変わっていく中で、この視点は次第に色あせていった。⁹⁾と過去の対象への援助の限界を指摘し、対象の拡大とそれにとまらぬ新たな視点の必要性を強調したのであった。

次に病理モデルの限界を決定づけたのは、②効果の問題である。ケースワークの効果測定は、従来ケースワークの科学化を促進させ、技術として

の社会的評価を位置づけるものと理解されてきた。こうした理解に反して効果測定に関する科学的研究は、深まらず、個人への治療のみに焦点づけられたケースワークの効果は、クライアントの主観的な満足度にさえ反映しなくなっていったのである。こうした傾向は、一元的・直線的援助の結果であった。伝統的ケースワークの援助展開過程は、効果を期待する実践現場の実態にそぐわず、環境への着目やクライアント自身の力の活用、そして過程展開そのものと効果への関係を模索し始めるようになったのである。

第三は、③隣接科学の成果と貢献によってパラダイムの変化が起こったことにある。多くの隣接領域の学問があるなかで、ソーシャルワークにとってシステム論や生態学理論の貢献は大きい。特にこれらの理論は、対象・問題のとらえ方や援助の展開の仕方などに変化を与え、新たなソーシャルワーク・モデルを形成していく基礎になったといえるからである。病理モデルから生活モデルへの移行は、これらの三つの課題を達成していくための必然的結果であったといえる。

(3) 生活モデルの出現

ソーシャルワークにおける生活の発想は、1960年代のバンドラー (Bernard Bandler) によって最初に提唱された。この発想は、リッチモンドの時代まで溯れば決して新しいものではない。しかしシステム論や生態学理論を基礎とした今日の生活モデルは、単にクライアントの環境重視を強調するだけでなく、客観的に環境を説明したり活用したりする積極的な要素を含むものであった。

1970年代初めになると、オックスレー (Genevieve B. Oxley) やストレーン (Harbart S. Stean) により生活モデルの体系化が、試みられた。一方、わが国では、社会福祉方法論統合化の議論と並行して生活モデルを検討するようになってきた。特に、岡村重夫⁹⁾は、こうした動向のなかで旧来の方法を統合するのではなく、新たな介入モデルによる方法論の必要性を論じた。同様に平山尚⁷⁾や小松源助⁸⁾も方法論統合化のためには、新しいモデルの構築を強調しそのための手が必要としてシステム論を紹介するようになったのである。

こうしてシステム論の評価は高まり、ソーシャルワークは、システム論を導入しはじめたのである。システムとは、ベルタランフィの一般システム論によると「相互に作用しあう要素の集合⁹⁾」と定義されている。システム論のソーシャルワークへの効果は、「ある対象に対してその部分(要素)を想定し、かつ、その部分(要素)が相互に作用していると考えられる時、システムとして記述することが可能になった」と稲沢¹⁰⁾も指摘するように、人間などの有機体から制度などの無機的なもの、さらに抽象的なものに至るまでを、システムで説明可能としたことにある。

システム論の影響は、あらゆる学問領域に広まっていったのだが、ソーシャルワークへの導入は、1958年にハーン(Gordon Hearn)によってもたらされた。特に彼は、人間と環境とを並列的で対等なシステムと見なし、両システムの接触面に焦点をあて、そこに生じている現象の交互作用を最善にしていくことにシステム論のソーシャルワーク実践での価値があると述べている。この考えは、従来の間人か環境かの二元論でなく、その全体関連性を説明したことにおいて画期的であった。しかし一方で、システム論の人間の行動や行為を説明する際に用いる非人間的表現や抽象的解説が、ソーシャルワークに馴染まなかったこともあり、システム論のソーシャルワークにおける発展は、実践や教育への浸透を阻む結果となったといえる。

一般システム論を用いて Unitary Approach を展開したゴールドシュタイン(Howard Goldstein)¹¹⁾もシステム理論の限界を次のように述べている。彼は、システム理論を

- ①社会的・物質的内容をともしクライアントの複雑性を明らかにしようとするが、その応用方法を示していない
- ②どこか抽象的で、クライアントと接するワーカーの経験的実情からかけ離れたものである
- ③実践的イメージのない学生にシステムアプローチを教えることが困難である

という3つの点からソーシャルワークの活用の問題があると指摘したのである。

一方、ハーンの考えに影響を受けながらも、人間主義と科学の相反する領域の溝をうめていこう

としたのが、生態学理論をソーシャルワークに導入したジャーメイン(Carel B. Germain)である。彼女は、次の3つの行動が実践のための生活モデルに欠かせないと述べ、その行動に貢献できるのが生態学的視点¹²⁾であると強調した。

- ①人間の成長力と適応への潜在的可能性にかかわっていくこと
- ②援助媒体としての環境を動かすこと
- ③環境の要素を変えていくということ

しかし、ソーシャルワークにとってシステム論より理解しやすいと評価された生態学の視点でさえも、問題の全体的動きを生態系を用いて解説するのにとどめられていた点では、具体的展開への貢献度においてシステム論と変わらなかったといえよう。こうした課題を抱えているものの、システム論は、クライアント生活のなかにある人や環境のシステムの動きを正確に理解することを強調し、生態学理論は、そうした生活システムの時間的流れや変化を客観的に整理しようとした点に固有の特質を持ち、両者の特質を生かしたソーシャルワーク実践に期待がかけられるようになったのである。これがエコシステムの視点であり、サイポーリン¹³⁾の指摘にもあるように今後の新しいソーシャルワーク展開に大きな意味を有すると考えられている概念なのである。

3. エコシステムの視座とその特質

(1) システム的視点と生態学的視点の特徴

エコシステムの発想は1983年にメイヤー(Carol H. Meyer)によって一般システム理論と生態学理論との統合をとおして、より実践に有効な視座として紹介された。特に彼女は、「エコシステム理論は、ソーシャルワーカーや臨床家に、思考方法や人びととそれを阻害している環境との相互関係についてのアセスメント方法を示す理論哲学である。¹⁴⁾」と主張し、エコシステムの視点が、より正確なアセスメントを展開するうえで意義のあることを強調したのである。このような動きは、近年ますます支持されるようになってきたが、まだエコシステム概念やその特徴が一定の認識の基に整理されるまでには至っていない。

またエコシステムは、システム的視点や生態学的考えと同じであるというような誤解を受けてい

る状況もある。確かにエコシステムは、システム論と生態学理論の融合のなかで構築されてきたものであるため、それぞれの境界を明確にしていこうことは困難であるが、両者の特質を兼ね備えた概念であってどちらか一方の徴特のみで構成されていないことは明白である。こうした状況も鑑み、まず第一にこれまでソーシャルワークのなかで紹介されてきたシステムの視点と生態学的視点の特徴を整理することが、エコシステムの特徴を理解する基礎となると考えシステムの視点と生態学的視点の比較表¹⁵⁾を作成した。表1は、両者の理論的起源から機能の特性、ソーシャルワークにおける問題点など6項目について比較したものである。

システムの視点と生態学的視点は、相対立する概念のように理解されているが、表1からも理解されるようにソーシャルワーク実践では、システム理論導入に影響されて生態学理論も取りあげられたというように両者の強い結びつきがみられる。とりわけ、両視点とも援助の焦点を人と環境のなかの「二重性」と「同時性」にあてていることや、独自の機能を固有の用語で説明してきた経過は、共通している側面といえよう。

しかしシステムの視点が、クライアントとソーシャルワーカーのソーシャルワーク実践展開の枠組を整理することを強調し、他方、生態学的視点が、クライアントの生活やそこに生起する問題を人間と環境のかかわりや時間的動きを中心に説明しようとした点では、生活理解の広がりや認識方法にそれぞれ固有の特質がみられる。このような固有の特質にサイポーリンやメイヤーなどは着目し、生活やその問題をより正確に客観的に理解するためには、システムの視点と生態学的視点の両方の特質を兼ね備えた視点を構築していくことが不可欠であると主張したのである。こうした発想がエコシステムであり、今日ようやくエコシステムの視座に立った援助過程や局面研究は始められてきたといえる。

(2) エコシステムの視座の特質

エコシステムの視座は、先行研究をみる限り数少なく十分といえないが、理解されている範囲で特質を整理すれば概ね4つにまとめられる。まず第一の特質は、ソーシャルワーカーとクライエン

トに問題そのものの見方を変えさせる視点である。パーデック (John T. Pardeck) が指摘するように「エコシステム概念は、焦点を個々のパーソナリティと行動機能の理解から個人とエコシステムの間にある相互作用の理解に移す¹⁶⁾」ものである。そのためソーシャルワーカーはもちろん、クライアントにとっても、問題や状況の複雑さと時間やシステムの変化に応じた問題理解を行うことに焦点を置いた援助展開を重視することになる。

次に第二の特質は、エコシステム概念がメタ・モデルであり、複雑でシステムテックな問題状況を客観的に説明するには適していることにある。これまで、病理モデルを基礎に展開されてきた援助は、まさに実践モデルであり、それ自体が直接的に援助展開に示唆を与えてきたものであった。しかしメタ・モデルであるエコシステムは、処方箋を与えるように援助に関与するのではなく、エコシステムの視点を持つことによってソーシャルワーカーに援助目的や行なうべき行動の方向性を示唆するのに留まると考えられている。たとえばオメリリア (Michael O' Melia)¹⁷⁾ が、エコシステムの視点から

- ① 焦点化されたシステムに同一視すべきである
- ② システムのなかに何が起るのか
- ③ システムの外に何が起るのか
- ④ どのようにシステムのなかと外は結びつのか
- ⑤ システムは時間をとおしてどのように動くのか

という5つの実践のための活用枠組を示すように、エコシステムは、ソーシャルワーカーに問題や対象を理解する広範で動きのある視点を持たせようとしている。このようにエコシステムの視座を強調する研究者たちは、メタ・モデルであることを了解のうえ、それを具体的に実践で活用するための思考方法や規則を整理し始めてきているのである。

第三に指摘される特質は、メイヤーをはじめとする多くの研究者たちの指摘するエコシステムの視点を実践で具体化するものとしてのアセスメントの意味である。メアリスとラネ (Paula Allen-Meares and Bruce A. Lane)¹⁸⁾ は、エコ

表1 ソーシャルワークにおけるシステムの視点と生態学的視点の特徴

各視点の特徴 比較項目	システムの視点	生態学的視点
理論の起源	①物理学からの発展	①生物学からの発展
ソーシャルワーク導入への経緯	①1950年代後半、ゴードン・ハーンにより導入 ②一般システム論における要素間の相互作用し合う関係に着目した	①1970年代後半、カレル・ジャーメインにより導入 ②ゴードン・ハーンの影響を受ける ③地球の日（アメリカの環境保護運動記念日 [1970. 4. 22]）から環境と生活の質の関係に着目し、社会科学の領域で発展する
焦点	①同時に二重の視点に焦点化 a. 人とその状況 b. システムとその環境	①人と環境の交互作用
ソーシャルワークに採用された概念	①オープン・システム—個人から社会に至る範囲で境界を越えて、他のレベルのシステムとエネルギー・物質または情報の交換を行う（定常状態・等結果性） ②エントロピー—熱力学第二法則で物体や物体系の変化の方向を表す量。ソーシャルワークでは人間の生活や成長・発達を説明する概念（生物が生き続けていくために絶えず何かをしていくこと） ③フィードバック—人と環境からなるシステムにおいて、環境が人に意志決定させ、それに基づく行動へ導く一方、その行動が環境に働きかけることで、新しい環境が将来の意志決定作用に及ぼす場合の情報提供と活用を行う	①関心の単位—交互作用は、人と環境の接触面に生起し、そこにある二重で同時的な焦点がソーシャルワーカーの関心の単位となる ②人間の特性に関する概念—人間は環境によって変えられる存在だが同時に環境を変える存在である（関係性・コンピテンス・自己指南・自己評価） ③環境の特性に関する概念—環境を物理的環境と社会的環境に分けて整理。時間と空間にも着目し、環境を説明すること（公害・圧迫） ④生活問題の発生概念（ストレス）—ニーズと能力の不一致による心理・社会的状態や環境の特性として生ずるストレスで生活問題が起こること
推進者とアプローチ	①ピンカスとミナハン モデルの要素を体系化するために活用 change agent system target system action system の基礎システムを表わした ②ゴールドステイン 変革システムとしてのワーカーとクライアント・システムとの相互作用の理解 ③コンプトンとギャラウエイ 概念枠として用いる（分析や思考の方法、より包括的な方向性を与えるものとして理解）	①ハートマンとライド 家族中心ソーシャルワーク （エコロジカルな視点を家族と実践のなかに応用） ②ジャーメインとギッターマン 生活モデルアプローチ （個人と集団に対するソーシャルワーク実践の統合的方法に対する視点を応用） ③マルシオ コンピテンス・アプローチ （「人間：環境」の交互作用の望ましいあり方としてクライアントのコンピテンスを育成していくことに焦点を当てる）
問題	①用語が抽象的であり、人間や環境を説明するのになじまない ②概念整理が十分されていない ③問題を説明することは可能でも実践での方法展開への示唆がない	①人間・環境の両者を広くとらえるため、理解する範囲が広く抽象的になってしまっている ②生態学のみでは問題の動きを説明するのにとどまり、実践での具体的展開や方法の示唆がない

システム・アセスメントの枠組表を作成し、それをもとに6つアセスメントの実践原則を提示した。

原則1 包括的なエコシステム・アセスメントは、多くのエコシステムについて集められたデータを要求する。

原則2 アセスメントは、3つのデータ資源（環境のなかの人、重要な他者、クライアントの直接観察）すべてのデータを含むべきである。

原則3 アセスメントは人と状況を描く重要なデータ変数のすべてのデータを集めなければならない。

原則4 包括的なアセスメントは、可能な限り多くの構成要素を含むべきである。

原則5 アセスメント・データは、クライアントの状況の包括的な絵図のなかに統合されなければならない。そして、エコシステム・アセスメントは、人と環境の相互作用の機能しない側面に同一視されるべきである。

原則6 エコシステム・アセスメントは、インターベンション段階に取捨選択したレポートリーと結び付けなければならない。

また、ギルガン (Jane F. Gilgum)¹⁹⁾ は、エコシステム・アセスメントがクライアントの環境の認知を必要とし、そのためにジェノグラムやエコマップを用いると述べている。このように、エコシステムの視座とアセスメントは密接に結びついており、アセスメントの方法や手続きをどのように展開していくのが、エコシステム概念を実践で具体化していくことにもなるのである。

そしてエコシステム視座の最後の特徴は、その視座のもとに援助が具体化する際、クライアントへの直接的援助から環境調整の間接的援助までを包含する広義の過程を展開するという点にある。わけてもエコシステムの視座は、これまでのソーシャルワークで比較的軽視されてきた環境調整への援助とその具体的方法に目を向けてきており、その点は新しい展開を期待できる側面である。パーデックもエコシステムの実践にはEcoScanとソーシャルサポート・ネットワーク²¹⁾が必要であると述べており、環境調整に関する方法の精緻化

は今後のソーシャルワークにとって重要な課題となる。

これら4つのエコシステムの視座の特徴は、各々が個別にあるのではなく相互に関連しており、それらが、複雑な生活問題解決への高い可能性を秘めている。しかしながらエコシステムは、あくまでも抽象性の高い視座である。そのためそれ自体が、実践方法を提供しないことを再確認するとともにそれを具現化する概念としてのアセスメントを明確化していくことは、緊急に取り組む課題でなければならない。

4. おわりに

ソーシャルワークは、1970年代を境に病理モデルを基礎とした理論から生活モデルを構築する理論へと移行してきた。このような理論の変遷は、ジャーメインの系統図²¹⁾のなかでも若干整理されているが、今日では、ケースワーク成立当初と比べものにならないほど細分化され多様化²²⁾されてきている。こうした動きは、繰り返し述べているとおり1960年代以降の社会状況による問題の多様化と複雑性に対応するために、ソーシャルワークが、試行錯誤して新しいモデルと理論を作り上げてきている成果である。特に、1970年代に入ったソーシャルワークにとって①援助効果への着目、②多様で多量なケースに対する対応、③独自の対象領域への関心、とのかかわりから新しい理論は検討されていくようになったと考えられる。

こうして1970年代以降のソーシャルワーク理論は、①発想、②視野、③方法展開という3つの観点でパラダイムの転換がなされたといえるだろう。具体的には、1970年代以前の病理モデルを基礎としたソーシャルワークの狭い援助展開をあげることができる。それは、ソーシャルワーカーのクライアントに対する理解が医者对患者に対する病理的理解と同様のものであったことに起因する。そのため消極的な人間観のなかで行うソーシャルワーカーの援助に限界があり、発想転換を余儀なくされたのである。

また視野という点においても、以前はソーシャルワーカーの援助範囲を考えるとクライアント個人にしか焦点づけられていなかった。特に診断主義学派を継承してきた理論は、ソーシャルワーカー

ーがクライアントのパーソナリティにしか興味を示さなかったためクライアントの生活にかかる環境調整のような間接援助は、ソーシャルワーカーにとって主たる関心でなかった。方法展開においても、面接室のなかでの援助関係とそこでのクライアントの発達や成長を求めることに終始したソーシャルワーカーの一元的かつ直線的援助が一般的であった。これらの方法は、いかにクライアント自身を変化させていくかということに重点が置かれた。また長年培われてきた勘や経験を重視してきたという意味では、心理的援助に傾倒してきた時代でもあった。

しかし1970年代に入りこれら3つの観点は、社会状況の変化や人間に対する価値の変容、見方・意識の変化により転換がはかられた。新しいソーシャルワークの発想は、根本的にクライアント認識を変化させた。それは、クライアントを積極的に自らの問題を取り組む人ととらえ、ソーシャルワーカーにとっても最良のパートナーであるという見方を取り込んだ点である。そのためクライアントが、援助過程に参加するための方法論も検討されるようになり、ソーシャルワーカーの役割や機能も専門的教育と新たな概念・価値に裏付けられた援助が強く求められるようになってきたといえる。

視野については、広い範囲での生活状況や問題認識の必要性を指摘するようになった。特に、環境を調整する視点や個別のクライアントの問題をマクロの政策レベルまで広げて考えていくようになり、本課題であるエコシステム研究に焦点が当たようになってきたと考えられる。

アセスメント概念は、こうした1970年代以降のパラダイムの変化にともなって、ソーシャルワーク理論が生み出した最重要概念である。特にアセスメントは、エコシステムの視座からクライアントの生活問題に関する情報を収集し認識するという直接的かつ具体的な過程局面として理解されており、ソーシャルワーク実践過程での適用と効果は、かなり期待されていると考えられる。

しかしながら、このようにエコシステムの視座とアセスメントは、連動しているにもかかわらず、これまでアセスメントの技法にだけ焦点が当てられてきた感否めない。そこで本稿では、ア

セスメント概念を適確に理解し整理していくうえで基盤となるエコシステムの視座の考察を試みたつもりである。まだエコシステムの視座の課題は残っているものの、次回はこの認識をふまえたアセスメント概念とその機能の考察を行いたいと考えている。

(1997. 7. 8 受理)

注

- 1) 拙稿「ソーシャルワーク実践過程としてのアセスメント研究の意義」『社会問題研究』第46巻 第1号 大阪府立大学社会福祉学部 1997年 79—82頁
- 2) 高沢武司「社会福祉理論のパラダイムの転換」仲村優一編『福祉サービスの理論と体系』誠信書房 1989年 38—41頁
- 3) H. H. アプテカー 坪上宏訳『ケースワークとカウンセリング』誠信書房 昭和39年 41頁
- 4) 松井紀和監修『ソーシャルワーカーのための精神医学』相川書房 昭和51年 17頁
- 5) カレル・ジャーメイン他著 小島蓉子編訳『エコロジカル・ソーシャルワーク』学苑社 1992年 184頁
- 6) 岡村重夫「方法統合化の意義」『社会福祉研究』第19号 鉄道弘済会 1976年 40—45頁
- 7) 平山尚「米国の方法論統合化への過程—システム論と実践理論の関係と応用—」『社会福祉研究』第19号 鉄道弘済会 1976年 46—51頁
- 8) 小松源助「社会福祉実践活動における方法の統合化—その具体化をめぐる課題—」『社会福祉研究』第19号 鉄道弘済会 1976年 52—57頁
- 9) フォン・ベルタランフィ 長野敬・太田那昌訳『一般システム論—その基礎・発展・応用—』みすず書房 1973年 35頁
- 10) 稲沢公一「生態学的視点の理論的境界—社会福祉原理研究ノート〔1〕—」『社会福祉学』第33巻 2号 日本社会福祉学会 1992年 165頁
- 11) ハワード・ゴールドシュタイン 秋山薊二訳「ソーシャル・ワーク実践の変化の果たす役割—統合アプローチから認知的ヒューマニズムへ—」『ソーシャルワーク研究』Vol. 10 No. 3 1984年 64頁
- 12) カレル・ジャーメイン他著 前掲書 8頁
- 13) 小松源助『ソーシャルワーク理論と歴史の展開』川島書店 1993年 188頁
- 14) Carol H. Meyer(ed), *Clinical Social Work in an Eco-Systems Perspective*, Columbia University Press, 1983, pp. 20-25.
- 15) 小松源助 前掲書 187—204頁

- 岡村重夫・高田真治・船曳宏保 『社会福祉の方法』 勁草書房 1979年 55—168頁
- 16) John T. Pardeck, *Social Work Practice: An Ecological Approach*, Auburn House, 1996, p. 101.
- 17) Karla Krogsrud, Michael O'Melia, Brenda L. DuBois, *Generalist Social Work Practice: An Empowering Approach*, Allyn and Bacon, 1995, p. 53.
- 18) Paula Allen-Meares and Bruce A. Lane, *Assessment: A Sourcebook for Social Work Practice*, Families International, Inc. p. 8.
- 19) Jane F. Gilgun, "An Ecosystemic Approach to Assessment", Beulah R. Compton & Burt Garaway, *Social Work Processes*, Wadsworth, Inc. 1989. p. 455.
- 20) John T. Pardeck, *op. cit.*, p. 101.
- 21) 太田義弘 『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』 誠信書房 1992年 91頁
- 22) 佐藤豊道 「社会福祉援助技術の歴史的理論展開と新しい枠組み」『社会福祉研究』第66号 鉄道弘済会 1996年 99—106頁